

今昔物語集の「にけり」

ーテキスト機能の諸相ー

藤井 俊博

1. 問題の所在

テキスト機能とは、ある語の語彙的意味・文法的意味を基礎に、文章展開に関わって（時として）発現される機能である。これまでの成果として、過去の助動詞とされる「けり」が物語に「枠づけ」をするテキスト機能を持つことを阪倉（1956）が論じ、完了の助動詞「ぬ」が「場面閉じ」の機能を持つことを鈴木（1999）が指摘した。この「ぬ」「けり」が合わさった「にけり」にはいかなるテキスト機能が考えられるであろうか。鈴木（1999）は、「にけり」がアスペクト的にはパーフェクトを表しつつ動作主体の「消失」を示す特徴を指摘したが、文章論的観点から更に考察すべき点がある。

筆者は藤井（2011）で、今昔物語集（以下、「今昔」と略称する。用例は日本古典文学大系本）の天竺震旦部、本朝仏法部において「けり」が話の冒頭部と終局部に用いられ、「枠づけ」の役割を果たしている場合が多いことを指摘した。また、藤井（2011）では、事件の終局部に「にけり」をとる例（失ニケリ・止ニケリ等）が最も多いことを指摘し、また藤井（2012）（2013）で、宇治拾遺物語・古本説話集でも同様の傾向が見られることを指摘した。これらを通して、「にけり」はテキスト機能として終結機能を最も顕著に表す

表現であることが明らかになってきた。これらの論で指摘した終結機能は、事件の終局部を示す目印になる用法である。天竺震旦部・本朝仏法部までは、「にけり」は一般に展開部に用いず、冒頭部の「有ケリ」とともに話の枠を作る例が多い。ところが、本朝世俗部では「にけり」は展開部にも多く見られる。この展開部の用例は、終結機能と関わりつつも別の機能を持っていると予測される。

本稿では、本朝世俗部などで展開部に多く用いられる「にけり」の用例を検討し、終結機能のバリエーションとしての段落構成機能・場面連結機能や、場面焦点化機能などの観点から分析を試みる。

2. 説話の文章構造と「にけり」

小川（1988）は、今昔の文章構成を冒頭部・語り部・評語部の三部構成として捉えた。本稿は、小川の説をふまえ今昔の文章構造を以下の要素に分け分析する。

冒頭部→語り部（展開部〔段落冒頭・段落途中・段落末尾〕終局部）→評語部

冒頭部は、主人公や事物の存在提示、名前・氏素性・性質・日常的行動等の解説、事件に至る行動・行跡についての解説的な叙述である。

語り部は、主人公の行動を迫真的に描

く中心的な叙述部分である。冒頭部や評語部では人物の行動が概略的・解説的に描かれるのに対して、語り部での人物の行動は、会話を含み、継起的・具体的に描かれる部分として特徴づけられる。語り部は、展開部と終局部（語り部の末尾2文）に分けるが、さらに展開部が複数段落（時間の経過で区切られる各場面）に分けられる場合がある。その場合、各段落を「段落冒頭」「段落途中」「段落末尾」に細分し、最終段落のみ「段落冒頭・段落途中」「終局部」とする。

評語部は、「後日談」「解説」「批評」「伝承」「教訓」等の補足的内容である。

今昔では、このような冒頭部・語り部・評語部を区分する目印として接続語が多用される。展開部や評語部の冒頭に慣用的に配される接続語（展開部の「而ル間」「而ルニ」「其ノ時ニ」など、評語部の「其ノ後ニ」「此ヲ思フニ」など）である。また展開部が複数段落の纏まりになる場合にも接続語は段落区分の目印になっている。本稿の論じる「にけり」は、このような接続語の直前に用いられることが多いため、文章構造との関わりを考察する手がかりにできる。

3. 「にけり」の文末用法の特質

そこで次に、「にけり」が文末用法に偏するという構文上の特質と、「にけり」に続く接続語の傾向を明らかにしたい。

まず、構文上から「にけり」は「けり」と比較し文中用法よりも文末用法へ大きく傾斜している点を指摘する。文を続ける用法である文中用法に対して、文末用法は文章の流れを切る用法である。終局部や段落の切れ目を示す機能を持つ「に

けり」の構文上の傾向として注目される。表1は、「にけり」と「にけり」の文中用法と文末用法の例数を示したものである。また資料1・2には、文末用法と文中用法の表現形式の例数を示した。

（表1）文中・文末の例数

	文中	文末
にけり	294	948
けり	4910	3516

（資料1）文末用法

にけり=874 にける=67 にける也=0

けり=2285 ける=1104 ける也=75

にける也けり=7

ける也けり=52

（資料2）文中用法

にければ=240 にけれども=5 にける+名詞=14

ければ=1791 けれども=271 ける+名詞=1284

にけるに=20 にけるを=8 にけるが=5

けるに=1034 けるを=368 けるが=116

にけるは=2 にけるも=0 にけるより=0

けるは=28 けるも=9 けるより=9

表1に纏めたように「にけり」単独では文中用法は文末用法の約1・4倍が用いられているが、逆に「にけり」では文中用法は文末用法の三分の一弱しかなく、文末用法への傾斜が著しい。このような傾向は、終結機能を担う「にけり」の性質に関わり、文末に用いて文章の切れ目を作る形式として強く意識される要因になると考えられる。

また、資料1と資料2との比較から「にけり」系統の文中用法にも特徴が窺える。まず文中で「にければ」が比較的多いものの、その他の例がかなり少ない点が挙げられる。「けり」系統では「ければ」が多いだけでなく、「ける+名詞」「けるに」「けるを」「けれども」「けるが」などに

も相当数の例があるのと対照的である。その「にければ」も終止形の「にけり」の27%しか見られず、「ければ」が終止形の「けり」の78%に当たる数が見られるのに比べると極めて少ない。

「にけり」系統では、例の少ない文中用法にも特徴が見られる。「にける＋名詞」の場合は、名詞の種類に偏りがあり「事(4例)・者(2例)・時・夢・許・程・中・後・様・終道(各1例)」などで、形式名詞や時間や場所に関わる語など抽象的なものに限られる。「事」「者」は、「成ニケル事」(巻一二ノ二八)「来ニケル者カナ」(巻二七ノ四五)のように詠嘆的に用いる文末の用法である。これを含めて、これらの名詞と連体修飾節との関係はいわゆる「ソトの関係」で、連体修飾節が独立であることが指摘できる。この点、単独の「ける」が登場人物や事物などに係る例が多く、「天竺ヨリ渡ラムトシケル仏法」(巻六ノ一)のような「ウチの関係」を作る例が多いのと対照的である。

以上のような文末に多く見られる傾向は、内容を区切る終結機能を担うテキスト機能の背景になる性質と解される。

さらに、「にけり」の終結機能を明確にする要素として、区切れの目印となる接続語が続く点を挙げておきたい。今昔では、「にけり」の後続語句に内容を区切る指標となる表現が多く見られる。例数の多いものは次の語句である。

そののち(99)、しかれば(65)、となむかたりつたへたとや(57)、これをみる・きく(41)、さて(34)、そのときに(32)、しかるあひだ(27)、これをおもふに(19)、しかるに(13)
「となむかたりつたへたとや」が続

く場合は、話全体の終結を表わす用法である。「これをみる・きく」が続く場合は、見聞きした周囲の人々の反応を続けて記す表現であり内容を区切る指標にはならない。これら以外の例は、「にけり」と合わさって内容の切れ目を明確にする接続語の類である。最も多い「そののち」が続く場合は、段落末尾や終局部に「にけり」を用いたあとに別の段落や評語部(後日談)が続く場合で、内容の大きな区切りを作るものである。話末評語の慣用句「しかれば」「これをおもふに」が続く場合も、話末評語の直前の終局部に「にけり」が使われる場合であり、終局部の区切りを明示する終結機能に関わる場合である。その他、「さて」「そのときに」「しかるあひだ」「しかるに」等のように、展開部の区切りを示すものが多く見られる。

以上、「にけり」が文末用法に多く用いられ、また、その後に接続語が多く用いられることを指摘した。これらのことから、「にけり」は段落末尾の文に用いられ、後続の接続語と組み合わせたり、次の段落との区切りなる場合が多い事が展開部の特徴として予測される。以下には、この観点を手がかりにして、テキスト機能の種々相について考察していきたい。

4. 段落構成機能・場面連結機能

次に展開部の各段落の冒頭・途中・末(表2)

	天竺震旦	本朝仏法	本朝世俗
段落冒頭	6	25	68
段落途中	9	56	103
段落末尾	11	36	105

尾に見られる用法について述べる。

表2は、展開部の各段落の冒頭、途中、末尾のいずれに用いたかを、三部によって分けた数値である。いずれも本朝部とりわけ世俗部に例が多く見られる。

①段落構成機能

まず、段落（時間の経過で区切られる大場面）の末尾に「にけり」と接続語を用いた典型例を挙げる（実線は「にけり」、点線はその他の文末を示す）。

(1) 今昔、深草ノ天皇ノ御代ニ、蔵人ノ頭右近ノ少将良峯ノ宗貞ト云フ人有ケリ、大納言安世ト云ケル人ノ子也。形チ美麗ニシテ心正直也ケリ、身ノ才人ニ勝タリケレバ、天皇殊ニ睦マシク哀レニ思食タリケリ。然レバ、傍ノ人此レヲ憎ムデ、不意ズ思ケリ。

(2) 其ノ時ノ春宮ハ天皇ノ御子ニ御マシケルニ、此ノ憎ム人々、事ニ觸レテ、此ノ頭ノ少将ヲ、春宮ニ、便无キ様ニ常ニ申ケレバ、天皇春宮ト祖子ノ御中ニテ在スト云ドモ、春宮、此ノ頭ノ少将ヲ、事ニ觸テ便无キ者ニ思食シ積タリケリ。頭ノ少将、其ノ御氣色ヲ心得タリケレドモ、天皇ノ、此ク哀レニ睦マシキ者ニ思食タリケレバ、其事ヲモ不顧ズシテ、日夜朝暮ニ宮仕ヘ怠ル事無クシテ過ケル程ニ、天皇、身ニ病ヲ受テ、月来悩ミ煩セ給ルニ、頭少将、肝碎ケ心迷テ歎キ悲ムト云ヘドモ、天皇遂ニ失セサセ給ヒニケレバ、暗ノ夜ニ向ヘル心地シテ、身更ニ置キ所无ク思エテ有ケルニ、心ノ内ニ「此ノ世不幾ズ。法師ニ成テ、仏道ヲ修行セム」ト思フ心深ク付ニケリ。

(3) 而ルニ、此ノ少将ハ、宮原ノ娘也ケル人ヲ妻トシテ、極ク哀レニ難去ク思ヒ通シテ過ケル程ニ、男子一人・女子一人

ヲナム産セタリケル。妻獨身ニシテ我レヨリ外ニ可憑キ无人シト思ケレバ、少将極テ、心苦シク哀レニ思ト云ヘドモ、出家ノ心不退シテ、天皇ノ御葬送ノ夜、事畢テ後、人ニ此クト告グル事无クシテ失ニケレバ、妻子眷属泣キ迷テ、聞キ及ブ所ノ山々寺々ヲ尋ネ求ムト云ヘドモ、露、其ノ所ヲ不知ザリケリ。然テ少将ハ、御葬送ノ曉ニ、比叡ノ山ノ横川ニ只獨リ登リ、慈覺大師ノ、横河ノ北ナル谷ニ大ナル榎木ノ空ニ在マシテ、如法經書キ給フ所ニ詣デハ、法師ニ成ヌ。其ノ時ニ少将獨リ事ニ云ク、タラチネハカ・レトテシモ、ムバタマノ、ワガクロカミヲナデズヤアリケムトナム云ケル。其ノ後、慈覺大師ノ御弟子ト成テ、法ヲ受ケ習テ、其レヨリ今少シ深く入テ、勤ニ仏道ヲ行フ程ニ、聞ケバ、今ノ天皇ノ、位ニ即セ給テ、諒暗ナド畢テ、世ノ人皆衣ノ色替リヌラムト押シ量リテ、物哀ニ思ケレバ、入道獨リ事ニ、ミナ人ハ花ノ衣ニナリヌラム、コケノタモトハカハキダニセズトナム云ケル。如此クシテ行ヒケル程ニ、年月ヲ経ニケリ。

(4) 而ル間、十月許ニ笠置ト云フ所ニ詣デハ、只獨リ礼堂ノ片角ニ、蓑ヲ打敷テ行ヒ居タル程ニ、見レバ、人參ル。主ト見ユル女一人、女房立タル女一人、侍ト思シキ男一人、下ノ男女合ニ三人許ナム見ユル。居タル所ニ間許ヲ去キテ、此等ハ居ヌ。我レハ暗キ所ニ居タレバ、人有トモ不知シテ、忍テ仏ニ申ス事共粗聞ユ。吉ク聞ケバ、此ノ女人申ス様、「世ニ失ニシ人ノ有様知ラセ給ヘ」ト泣キ氣ハヒニテ哀ニ申ヲ、耳ヲ立テ吉ク聞ケバ、我が妻ニテ有シ人ノ氣ハヒニ聞キ成シヌ。「我ヲ尋ネム為ニ此ク行フ也ケリ」ト

思ヒ、哀レニ悲シキ事无限シ。「我レ此ニ有リトヤ云ハマシ」ト思ドモ、知セテハ何ニカハセム、仏ハ此ル中ヲバ別ネトコソ返タス教ヘ給ケル事ナレバ、思ヒ念ジテ居タル程ニ、夜モ嗟方ニ成ヌレバ、此ノ詣タル人々出ヅトテ、礼堂ノ方ヨリ歩ビ出タルヲ見レバ、男ハ、我ガ乳母子ニテ帶刀ニテ有リシ者也ケリ、七八歳許有シ我ガ男子ヲ背ニ負テゾ有ル。女ハ四五歳許也我ガ女子ヲ抱キタリ。礼堂ヨリ出デハ、霧ノ降タルニ歩ビ隠レケル程ニ、吉ク心不强ザラム人ハ被知ナムカシトゾ思エケル。

(5) 如此クシテ修行スル程ニ、靈驗実ニ強ク成ニケルハ。病ニ煩人ノ許ニ念珠・独鈷ナドヲ遣タルケレバ、物ノ氣現レテ、靈驗揭焉ナル事共有ケリ。

(6) 而間歹、恐レ奉シ春宮、位ニテ文德天皇ト申ケルニ、御惱有テ既ニ失セ給ニケリ。其後、其御子ノ清和天皇、位ニ即給ヒテ、世ヲ政チ給フ間、御惱有テ、諸ノ止事无キ驗有ル僧共ヲ召テ、様々ノ御祈共有ケレドモ、露ノ驗不御ザリケルニ、人有テ奏シテ云ク、「比叡ノ山ノ横川ニ慈覺大師ノ弟子トシテ、頭少將宗貞法師、勲ニ仏道ヲ修行シテ、靈驗揭焉也。彼レヲ召テ可令祈給シ」ト。天皇、此レヲ聞食シテ、「速ニ可召ベシ」ト度々宣旨有ケレバ、参タルニ御前ニ参テ御加持ニ参ル程、忽其ノ驗有テ、御病癒セ給ヒケレバ、法眼ノ位ニ被成ニケリ。

(7) 其ノ後行ヒ緩ム事无クシテ有ケルニ、陽成院ノ天皇ノ御代ニ成テ、亦、靈驗揭焉ナル事有テ、僧正ニ被成ニケリ。其ノ後ハ花山ト云フ所ニナム住ケル。名ヲ巴遍照トナム云ケル。年来其ノ花山ニ住テ有ケル。封戸ヲ給ハリ、輦車ノ宣旨ヲ

蒙テ、遂ニ寛平二年ト云年ノ正月ノ十九日ニ失ニケリ、年七十二也ケリ。花山ノ僧正ト云、此也。

(8) 然バ、出家皆機縁有ル事也。年来深草ノ天皇ノ寵人トシテ、文德天皇ニ恐セ奉ルニ依テ、忽ニ道心ヲ発シテ出家スルヲ以テ、出家ノ縁有ケリト可知キ也トナム語り伝ヘタリトヤ。(卷十九ノ一)

良峯宗貞が修行を深め、僧位を高めていく様が段落を追って描かれている。(2) 段落以前が冒頭部、(7) 段落以降が評語部と解される。展開部に至るまでの行跡を描いている(2) 段落末尾の「にけり」には接続語「而ルニ」が続いており、展開部との区切りになっている。

展開部では(3) 段落と(6) 段落で「にけり」を段落末尾に用い「而ル間」「其ノ後」を続けている。(6) 段落の末尾の「被成ニケリ」は、語り部の終局部における終結機能の例である。なお(6) 段落冒頭の「失セ給ニケリ」で終わる一文は、直後が「其後」で区切られており短小だが内容の纏まりをなしている。

評語部の(7) 段落冒頭の「被成ニケリ」で終わる一文も、「其ノ後」で区切られており短小だが後日談の内容の一部として纏まりを作っている。(7) 段落末尾の「失ニケリ」も後日談の例であるが、冒頭の「有ケリ」と対応し話全体の大枠を作っていると解される。

以上のように、最末尾の「失ニケリ」以外は、接続語「しかるに」「しかるあひだ」「そののち」が続いており、「にけり」と接続語によって段落を作る典型例となっている。点線を付した「ケリ」「ケル」の文末には接続語が続いていない場合が多いのと対照的である。また、この用法は、説

話全体を纏める終結機能の用法とも連続的である点が窺える。

②場面連結機能

次に、接続語を伴わない例を挙げる。次のように、「にけり」で終わる文を連続的に使用し、小場面を連結させているものである。これは、表2に示したように、本朝世俗部に多い用法である。

(1) 今昔、比叡山ノ西塔ニ実因僧都ト云人有ケリ、小松ノ僧都トゾ云ケル。顕蜜ノ道ニ付テ止事无カリケル人也。其レニ、極ク力有ル人ニテ有ケル。

(2) 僧都昼寝シタリケルニ、若キ弟子共、師ノ力有ル由ヲ聞テ試ムガ為ニ、胡桃ヲ取り持来テ、僧都ノ足ノ指十ガ中ニ胡桃ハヲ交ミタリケレバ、僧都ハ虚寝ヲシタリケレバ、打任テ被交テ後、寝延ビヲ為ル様ニ打ウムメテ足ヲ交ミケレバ、ハツノ胡桃一度ニハラハラト砕ニケリ。

(3) 而ル間、天皇ノ、僧都、内御修法行ヒケル時、御加持ニ参タリケルニ、伴僧共ハ皆通ニケリ。僧都ハ暫ク候テ夜打深更ル程ニ罷出ケルニ、従僧・童子ナドハ有ラムト思ケルニ、履物許ヲ置テ、従僧・童子モ不見ザリケレバ、只獨リ衛門陳ヨリ歩ミ出ケルニ、月ノ極テ明カナレバ、武徳殿ノ方様ニ歩行ケルニ、軽カニ装ゾキタル男一人寄来テ、僧都ニ指向テ云ク、「何ゾ独ハ御マスゾ。被負サセ給へ。己レ負テ將奉ラム」ト云ケレバ、僧都「糸吉カリナム」ト云テ、心安ク被負ニケレバ、男搔負テ西ノ大宮ニ条ノ辻ニ走り出テ、「此ニ下給へ」ト云ヘバ、僧都「我ハ此ヘヤ来ムト思ツル、壇所ニ行ムト思ツル」ト云ケレバ、男、然許力有ル人トモ不知ラ、「只有ル僧ノ衣厚ク着タルナリ」ト思テ、「衣ヲ剥ム」ト思ケレバ、鹿カニ打振テ、音ヲ

曠ラカシテ、「何デカ不下シテハ云フゾ。和御房ハ命惜クハ无キカ。其着タル衣得サセヨ」ト云テ、立返ラムト為ルニ、僧都「否ヤ、此クハ不思議リツ。我ガ独行クヲ見テ糸惜カリテ負テ行カムト為ルナメリトコソ思ヒツレ。寒キニ、衣ヲコソ否不脱マジケレ」ト云テ、男ノ腰ヲヒシト交ミタリケレバ、大刀ナドヲ以テ腰ヲ交ミ切ラム如ク、男難堪ク思ヘケレバ、「極テ悪ク思ヒ候ヒケリ。錯申サムト思給ヘルガ愚ニ候ケル也。然ラバ御マスベカラム所ニ將奉ラム。腰ヲ少シ緩ベサセ給へ、目抜ケ腰切候ヌベシ」ト術无氣ナル音ヲ出シテ云ケレバ、僧都「此コソ云ハメ」トテ、腰ヲ緩ベテ軽ク成テ被負タリケレバ、男負上テ、「何チ御マスムズル」ト問ヘバ、僧都、「宴ノ松原ニ行テ月見ムト思ツルヲ、汝ガサカシクテ此ヘ負テ将来レバ、先ヅ其二將行テ月見セヨ」ト云ケレバ、男、本ノ如クニ、宴ノ松原ニ將行ニケリ。

(4) 其ニテ「然ラバ下サセ給ヒネ。罷候ヒナム」ト云ヘドモ、尚不免シテ、被負乍ラ、月詠メウソ吹テ、時賛マデ立テリ。男佐ル事无限リドモ、僧都「右近ノ馬場コソ恋ケレ。其ヘ將行テ」ト云ヘバ、男「何デカ然マデハ罷候ハム」ト云テ、只ニ居ルヲ、僧都「然ラバ」トテ、亦腰ヲ少シ交ニケレバ、「穴難堪キ。罷リ候ハム」ト佐ビ音ニ云ケレバ、亦腰ヲ緩ベテ軽ク成ニケレバ、負上テ右近ノ馬場ニ將行ニケリ。其ニテ亦被負乍、无期ニ歌詠メナドシテ、其ヨリ亦「喜辻ノ馬場ニテ下様ニ永ク遣ラム、其將行ケ」ト云ヘバ、可辞クモ无ケレバ、佐テ亦將行ヌ。其ヨリ亦云随テ西宮ヘ將行ヌ。如此クシツ終夜被負ツ行テ、暁方ニゾ場所ニ將返テ通テ去ニケリ。

(5) 男、衣ヲ得タレドモ、辛キ目ヲ見タ

ル奴也カシ。此僧都ハ此クカゾ極ク強カ
リケルトナム語伝ヘタルトヤ。

(巻二三ノ十九)

実因という僧都が追い剥ぎの男を怪力
で締めつけあちこち連れ回す話である。

(2) 段落は挿話的な冒頭部と解され、
末尾に「碎ニケリ」を用い「而ル間」を続
けている。(3) 段落冒頭の「通ニケリ」と
ともに「場面起こし」の例でと解される
(次節参照)。

展開部の(3) 段落では僧都と男の会話
のやりとりを含む極めて長い文の末尾を
「将行ニケリ」とする。その後(4) 段落の
展開部でも「将行ニケリ」「将行ヌ」「将行
ヌ」「去ニケリ」とあちこち連れ回す場面
を「にけり」で区切って連続して描いて
いる。(2)～(4) 段落の文は一文を除き全
て移動動詞に「にけり」「ぬ」が付いた文
末で構成されている。

「ぬ」「にけり」文で展開部を構成する
例は、次のように短い話にも見られる。

然テ、二条ヨリ西様ニ遣セテ行クニ、
美福門ノ程ヲ過ル間ニ、盗人傍ヨリハラ
ハラト出来ヌ。車ノ轅ニ付テ、牛飼童ヲ
打テバ、童ハ牛ヲ棄テ逃ヌ。車ノ後ニ雑
色ニ三人有ケルモ皆逃テ去ニケリ。盗人
寄来テ、車ノ簾ヲ引開テ見ルニ、裸ニテ
史居タレバ、盗人奇異ト思テ、「此ハ何カ
ニ」ト問ヘバ、史、「東ノ大宮ニテ如此也
ツル。君達寄来テ、己ガ装束ヲバ皆召シ
ツ」ト笏ヲ取テ、吉キ人ニ物申ス様ニ畏
マリテ答ツケレバ、盗人咲テ棄テ去ニケ
リ。其ノ後、史音ヲ挙テ牛飼童ヲモ呼ケ
レバ、皆出来ニケリ。其ヨリナム家ニ返
ニケル。

(巻二八ノ十六)

阿蘇の史が宮中から帰る途中で盗人に
出会った話の展開部の全体である。盗人

が「～出来ヌ」のを受け、史一行が次々と
姿を消す場面が「～逃ヌ」「～逃テ去ニケ
リ」と連続して描かれる。話の中心部で
ある史の言葉を聞いた盗賊達は「去ニケ
リ」となり、「其ノ後」に史の一行も「皆
出来ニケリ。其ヨリナム家ニ返ニケル。」
と続け展開部は終わる。「出来ヌ」「逃ヌ」
「去ニケリ」「去ニケリ」「出来ニケリ」「返
ニケル」の各文は、短文ながら小場面を
構成しており、場面展開を明確に印象づ
けている。

このように、長文の場合から短文の場
合まで幅があるが、「にけり」が場面の切
れ目を作っている点は共通している。こ
の②の用法は、内容の切れ目はやや弱く
なるものの、①の段落構成機能の用法と
も連続していると言えよう。

このように今昔には「ニケリ」と接続
語を合わせて大きな段落の切れ目を作る
例や、「にけり」を文末で連続させ場面を
展開させる例も見られた。いずれも展開
部の内部の区切りとして「にけり」が使
用された例と解される。

5. テキスト機能の背景と広がり

このような内容の区切りとなる機能
は、「にけり」のどのような文法的意味を
背景にしているのであろうか。

前節で指摘したように、段落・場面の
末尾に「にけり」が多く用いられるのは、
「に」の用法によるところが大きいと思
われる。前節の巻二三ノ十九(3) 段落は
会話を含む長い一文で叙述されている例
であるが、このように展開部の極めて長
い一文の文末を「にけり」で纏める例は、
巻三ノ二八にも見られ、藤井(2012)
(2013)で述べたように宇治拾遺物語や

古本説話集にも見られる。また、長文を纏める用法は「ぬ」にも見られる。

郡司ノ男ノ云ク、「(会話)」ト云へバ、
教円、「(会話)」ナド云へバ、郡司ガ云ク、
「(会話)」ト云へバ、教円供奉ノ云ク、「(会
話)」ト云へバ、郡司喜テ、「(会話)」ト云
テ、去ス。(卷二八ノ七)

この例では、動作の連続する先行文脈を纏める位置に「ぬ」が使用されている。「ぬ」を含む「にけり」もこの点同様で、「にけり」に含まれる「に」が場面を纏め統括する機能を担っていると考えられる。前掲の卷二三ノ十九の(4)段落の「…将行ニケリ。…亦将行ス。…将行ス。…将返テ遁テ去ニケリ。」の例では、「～ニケリ～ヌ～ヌ～ニケリ」のように「ヌ」と「ニケリ」が同じ移動動詞を伴って交互に用いられているが、このような用い方からも、「にけり」が「ぬ」と近い機能を持っていることが窺える。

このように「ぬ」「にけり」が長文を纏める例が多い点は注目すべきである。「ぬ」は文法的意味としては動作の完成を表すが、単に上接動詞の動作の完成を意味するのではない。表現としては「ぬ」を含む文の事態の完成を表すと解される。そのため長文に用いられた「ぬ」「にけり」は一つの場面を纏め統括することにもなりやすい。「～して、～して、～してしまつた」のように文章展開の纏まりをつけるのが「ぬ」の特質であると言える。特に和文的な本朝世俗部では、長文が多いため、場面を纏める用法が多くなる。長い一文を纏める用法は、叙述内容が複数の文に分割された場合にもその機能が発揮される。「ぬ」は、事態の完成という文法的意味を基礎に、その動作に

関わる叙述全体を統括する文章機能を持ち、その統括によって内容を区切り終結させる効果をも持っている。

鈴木(1999)の言う「ぬ」の「場面閉じ」が移動動詞に付く場合に偏るのに対して、「にけり」の語形をとる場合は、変化動詞などにも多く付き、場面の終結をより強く表している。「にけり」がこのようなテキスト機能を持つのは、場面の統括(終結)を表す「に」の意味に、話・場面の終結を表す機能を持つ「けり」が合わさることにより、「ぬ」「けり」単独の場合に比べ、より明確なテキスト機能を発揮するためである。さらに接続語が加われば大きな段落・場面の区切りの目印になる。「ぬ」<「けり」<「にけり」<「にけり+接続語」の順で纏め区切る機能は強まると考えられる。

また、本朝世俗部では、次のように冒頭部の途中や末尾に「にけり」を用いる場合も見られる。この場合は、展開部との区切りを示しつつ、事件の発端を強調する面が強くなると解される。

(1) 今昔、奈良ノ京ニ下毛野寺ト云フ寺有リ。其ノ寺ノ金堂ノ東ノ脇ニ二観音在マス。

(2) 聖武天皇ノ御代ニ、其ノ観音ノ御頭、其ノ故无クシテ、俄ニ頸ヨリ落給ヒニケリ。檀越、此レヲ見テ、即チ、「継ギ奉ラム」ト思フ間ニ、一日一夜ヲ経テ朝ニ見奉レバ、其ノ頭、人モ継ギ不奉ザルニ、自然ニ本ノ如ク被継給ヒニケリ。

(3) 檀越、此レヲ見テ、「此ハ誰ガ継ギ奉タルゾ」ト尋ヌルニ、更ニ継ギ奉レル人无シ。然レバ、「奇異也」ト思フ間ニ、観音、光ヲ放テ、檀越、驚テ、此レ、何ノ故ト云事ヲ不知ズ。但シ、智リ有ル人ノ云

ク、『菩薩ノ御身ハ常住ニシテ、滅スル事无シ』ト云フ事ヲ、愚癡・不信ノ輩ニ令知メ給ハムガ為ニ、其ノ故无クシテ頭落給テ、人継ギ不奉ザルニ、本ノ如ク成リ給フ也』ト。

(4) 檀越、此レヲ聞テ、悲ビ貴ブ事无限シ。亦、此レヲ見聞ク人、皆貴ビテ、「奇異ノ事也」トテ語り伝ヘタルトヤ。

(巻一六ノ十一)

(1) 段落では「今昔、～観音在マス」と現在形で解説的に叙述する。続く(2)段落の「落給ヒニケリ」「被継給ヒニケリ」は、発端となる出来事を提示した冒頭部の用例である。語り部の(3)段落の展開部で、観音の頭をめぐる放光の奇跡や「智リ有ル人」の説明を聞いてその意味を檀越が理解するまでの場面を描き、(4)段落で「奇異ノ事也」と周囲の批評を記して一話が完結するが、(3)段落以降には「けり」は用いていない。

この例のように、冒頭部の途中や末尾の例は、各々40例・50例が見られる。この例では「落つ」「継ぐ」に付いているが、移動や変化を表す動詞に付く場合が典型的である。使用度数上位の動詞は、「なる」11例、「のぼる・ゆく・わたる」各3例、「うす・すぐ・やむ」各2例などがある。また、前掲の巻十九ノ一や巻二三ノ十九の冒頭部のように、「にけり」に続けて「しかるあひだ」(8例)や「そののち」(4例)など展開部の冒頭に接続語を続ける形が典型的と見られる。

何クトモ无行ヒ行ケル程ニ、飛弾国マデ行ニケリ。而ル間…… (巻二六ノ八)

然テ即チ垣ノ内ニ投入テ過ニケリ。其ノ後…… (巻二六ノ二)

これらの用法は、冒頭部で発端となる

行動や現場への移動を完成相で纏め、展開部に導入する用法である。西田隆政(1999)の言う「場面起こし」の用法であるが、このような典型例においては、「にけり」の冒頭部を纏め区切る機能が顕著に表れている。

6. 場面焦点化機能

ところが、本朝世俗部においては場面の統括・終結の機能が極めて弱いと思われる例も見られる。ここでは、展開部で一瞬の動作に焦点をあてる場面焦点化機能を付け加えておきたい。

(1) ……守ノ答フル様、「落入ツル時ニ、馬ハ疾ク底ニ落入ツルニ、我レハ送レテフメキ落行ツル程ニ、木ノ枝ノ滋ク指合タル上ニ、不意ニ落懸リツレバ、基ノ木ノ枝ヲ捕ヘテ下ツルニ、下ニ大キナル木ノ枝ノ障ツレバ、基レヲ踏ヘテ大キナル膝木ノ枝ニ取付テ、基レヲ抱カヘテ留リタリツルニ、基ノ木ノ平茸ノ多ク生タリツレバ、難見棄クテ、先ヅ手ノ及ビツル限り取テ、旅籠ニ入レテ上ツル也。未ダ残ヤ有ツラム、云ハム方无ク多カリツル物カナ。極キ損ヲ取ツル心地コソスレ」ト云ヘバ、郎等共、「現ニ御損ニ候」ナド云テ、其ノ時ニゾ集テ散ト咲ヒニケリ。

(2) 守、「僻事ナ不云ソ、汝等ヨ。宝ノ山ニ入テ、手ヲ空クシテ返タラム心地ゾスル。『受領ハ倒ル所ニ土ヲ掴メ』トコソ云ヘ」ト云ヘバ、長立タル御目代、心ノ内ニハ「極ク憎シ」ト思ヘドモ、「現ニ然カ候フ事也。手便ニ候ハム物ヲバ、何カ取セ不給ハザラム。誰ニ候フトモ、不取デ可候キニ非ズ。本ヨリ御心賢ク御マス人ハ、此ル不死キ極ニモ、御心ヲ不騒サズシテ、万ノ事ヲ皆只ナル時ノ如ク、用

ヒ仕ハセ給フ事ニ候ヘバ、不騒、此ク取ラセ給ヒタル也。然レバ国ノ政ヲモ息コヘ、物ヲモ吉ク納メサセ給テ、御思ノ如クニテ上ラセ給ヘバ、国ノ人ハ夫母ノ様ニ恋惜ミ奉ツル也。然レバ、末ニモ万歳千秋可御マスベキ也」ナド云テゾ、忍テ己等ガトヒ咲ヒケル。（巻二八ノ三八）

この例は、谷底に転落した藤原陳忠が平茸をもって生還した話である。冒頭を「有ケリ」で始めるが以降の内容は現在形の文末で進む。「咲ヒニケリ」の後に目代らとの問答が続いており、特に文章展開上の切れ目というわけではない（終局部は「咲ヒケル」）。谷底の平茸を拾い損なったという陳忠に郎等が「現ニ御損ニ候」と冗談めかして言った後に「散ト咲ヒニケリ」が使われる。このつい笑ってしまったことをきっかけに守の態度が変わる。笑いの場面から緊張した空気に場面を転換する一瞬の動作を「にけり」によって焦点化していると思われる。

このような一瞬の動作に焦点をあてる用法は、事態の変化・推移に焦点を当てる「ぬ」のアスペクト的特質によると思われる。この場合、「けり」の終結機能の側面は大きく後退し、「こんなことをしてしまった」という語感で用いた例と思われる。このような場面焦点化機能の例は、本朝世俗部における「にけり」の用法の広がりを示すものである。

7. まとめ

以上、今昔の「にけり」のテキスト機能について考察した。部毎の傾向から言うと、天竺震旦部の巻までは終局部の終結機能の用法が中心であるが、本朝部に至ると冒頭部から語り部へ導入する用法

や、展開部の段落構成機能の用法などが多く見られるようになる。本朝世俗部では展開部の用法が拡大し、「にけり」文によって小場面を続ける場面連結機能の用法や、場面に焦点をあてる場面焦点化機能の用法などの広がりが見られる。

これらの諸機能は、内容を統括し終結させる「にけり」の特質に基づいているが、今昔では、巻を追って、全体の枠を作る用法から、小さな枠を作る用法へと変遷が認められるのである。

参考文献

- 小川輝夫(1988)「今昔物語集の表現」『表現学大系第6巻 軍記と説話の表現』（教育出版センター）
- 阪倉篤義(1956)「竹取物語における文体の問題」(『国語国文』二五卷一一号)
- 鈴木泰(1999)『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト 源氏物語の分析』（ひつじ書房）
- 西田隆政(1999)「源氏物語における助動詞『ぬ』の文末用法―場面起こしと場面閉じをめぐって―」『文学史研究』40
- 藤井俊博(2011)「今昔物語集の『けり』のテキスト機能(続)―終結機能を中心に―」(『国語国文』第八十巻第十号)
- 藤井俊博(2012)「宇治拾遺物語の『けり』のテキスト機能―今昔物語集・古事談との比較―」(『同志社国文学』第76号)
- 藤井俊博(2013)「古本説話集の『けり』のテキスト機能―「にけり」「係り結び」の終結機能」(『同志社国文学』第78号)

(同志社大学)